

三
沢
宮
ノ
前
遺
跡
4

三沢宮ノ前遺跡4

— 福岡県小郡市三沢所在遺跡の調査報告 —

小郡市文化財調査報告書第296集

小郡市文化財調査報告書第296集

2015

小郡市教育委員会

小郡市教育委員会 二〇一五

三沢宮ノ前遺跡4

— 福岡県小郡市三沢所在遺跡の調査報告 —

小郡市文化財調査報告書第296集

2015

小郡市教育委員会

<序 文>

小郡市は、北部における宅地開発や北東・中南部における工業団地の開発が相次いで行われ、現在福岡・久留米両市のベッドタウンとして日々発展を続けています。これに伴い、交通網の整備も着々と進捗しつつあります。

今回ここに報告いたします「三沢宮ノ前遺跡4」は、県道本郷基山線取り付け道路の新設工事に先だって小郡市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書です。

本遺跡は、小郡市北西部の通称三国丘陵から延びる洪積台地の縁辺部に築かれています。今回の調査の中心となるのは古墳時代と中世の集落です。特に中世の集落では掘立柱建物を数棟検出し、これらを区画するような溝が調査区中央より見つかりました。おそらく、集落の土地の境として機能していたものと考えられます。

今回得られた成果が今後永く活用され、この報告書が文化財愛護思想の普及に寄与する一助となれば幸いです。

最後になりましたが、事業主体である福岡県久留米県土整備事務所、現地発掘調査にご理解とご協力をいただいた周辺住民の皆様、現地作業にあたった地元作業員の皆様など、発掘調査を進める際にお世話になった多くの方々へ深く感謝を申し上げ、序文といたします。

平成 27 年 3 月 31 日

小郡市教育委員会
教育長 清武 輝

<例 言>

1. 本書は、小郡市三沢地内における県道本郷基山線取り付け道路の新設工事に伴って、小郡市教育委員会が平成 26 年度に発掘調査を行った三沢宮ノ前遺跡 4 の埋蔵文化財発掘調査の記録である。
2. 発掘調査は、福岡県久留米県土整備事務所から委託を受け、小郡市教育委員会が行った。
3. 遺構の実測、遺構の写真撮影は杉本岳史、西江幸子が実施した。
4. 遺物の復元・実測・製図には、西江のほかにも久住愛子、衛藤知嘉子、佐々木智子、深町幸子、藤岡恵子ら諸氏に多大なる協力を得た。また、遺物の写真撮影は（有）システム・レコに委託した。
5. 遺構図中の方は座標北を示し、図上の座標は国土座標第Ⅱ系（世界測地系）に則している。
6. 本書で用いた標高は、東京湾平均海面（T.P.）を基準としている。
7. 遺物・実測図・写真は小郡市埋蔵文化財調査センターにて管理・保管している。
8. 本書の執筆は杉本、西江が担当し、編集は西江が担当した。

本文目次

第1章	調査の経過と組織	1	第4章	遺構と遺物	4
	1. 調査の経緯			1. 竪穴式住居跡	
	2. 調査の経過			2. 掘立柱建物	
	3. 調査の体制			3. 土坑	
第2章	位置と環境	2		4. 溝	
第3章	遺跡の概要	4	第5章	まとめ	13

挿図目次

第1図	三沢宮ノ前遺跡 過去の調査地点位置図 (S=1/2,500)	2
第2図	三沢宮ノ前遺跡周辺の主要遺跡分布図 (S=1/25,000)	3
第3図	三沢宮ノ前遺跡4 全体図 (S=1/200)	5・6
第4図	1号竪穴式住居跡・2号竪穴式住居跡実測図 (S=1/60)	9
第5図	1号掘立柱建物・2号掘立柱建物実測図 (S=1/60)	10
第6図	1号土坑実測図 (S=1/40)	11
第7図	1号溝・2号溝実測図 (S=1/80)	11
第8図	出土遺物実測図 (S=1/4)	12
第9図	三沢宮ノ前遺跡周辺調査地検出遺構 (S=1/400)	14
第10図	6世紀後半～7世紀前半段階の遺跡分布図 (S=1/50,000)	15

表目次

三沢宮ノ前遺跡4 出土遺物観察表

図版目次

図版1	①調査区東側全景 (真上から)
	②調査区西側全景 (真上から)
図版2	①三沢宮ノ前遺跡4 上空から花立山を臨む (西側から)
	②1号竪穴式住居跡・2号竪穴式住居跡・1号掘立柱建物全景 (真上から)
図版3	①1号竪穴式住居跡完掘 (南側から)
	②2号竪穴式住居跡貼床検出 (南側から)
	③2号竪穴式住居跡遺物出土状況 (北側から)
	④2号竪穴式住居跡北東隅部掘込 (南西側から)
	⑤2号竪穴式住居跡北西隅部掘込 (南東側から)
	⑥1号掘立柱建物完掘 (南側から)
	⑦2号掘立柱建物完掘 (南側から)
	⑧1号土坑完掘 (南側から)
図版4	①1号溝完掘 (南側から)
	②1号溝北壁土層 (南側から)
	③2号溝完掘 (南側から)
	④2号溝北壁土層 (南側から)
	⑤3号溝～10号溝完掘 (南側から)
図版5	出土遺物

第1章 調査の経過と組織

1. 調査の経緯

三沢宮ノ前遺跡4発掘調査は、小郡市三沢字宮ノ前 2319-4、2318-3、2326-3、2327-6において、道路工事のため遺跡面が掘削されているのを平成26年6月23日に確認したことに始まる。小郡市教育委員会では、すぐに、道路工事主体者である福岡県久留米県土整備事務所と埋蔵文化財に関する協議を行った。

協議の結果、道路工事部分の482.44㎡について発掘調査を実施することとなり、平成26年6月30日に発掘調査委託契約書を締結して、同年7月8日より発掘調査を行った。

2. 調査の経過

発掘調査は平成26年7月8日から同年9月11日にかけて実施した。調査の主な経過は以下のとおりである。

7月8日 発掘作業員を投入し、西側部分の遺構検出・掘削開始。

7月30日 西側部分の全景写真撮影。

8月11日 東側部分の遺構検出・掘削開始。

8月13日 西側部分の現場引き渡し。

9月6日 東側部分の全景写真撮影。

9月11日 西側部分の現場引き渡し、調査完了。

以後、図面・遺物整理作業及び報告書作成実施。

3. 調査の体制

三沢宮ノ前遺跡4における発掘調査に関係する組織は以下のとおりである。

[平成26年度]

【福岡県久留米県土整備事務所】

所 長 小路 智

<都市施設整備課>

課 長 本田 顕子

副 長 小野 吉弘

技術主査 長野 裕信

【小郡市教育委員会文化財課】

教育長 清武 輝

教育部長 佐藤 秀行

<文化財課>

課 長 片岡 宏二

係 長 柏原 孝俊

技 師 杉本 岳史 (調査・整理担当)

技 師 西江 幸子 (調査・整理担当)

[発掘作業従事者]

石井京子、梅崎元春、鐘ヶ江智津子、草場誠子、佐々木悦夫、佐藤照子、田中功（敬称略）

第2章 位置と環境

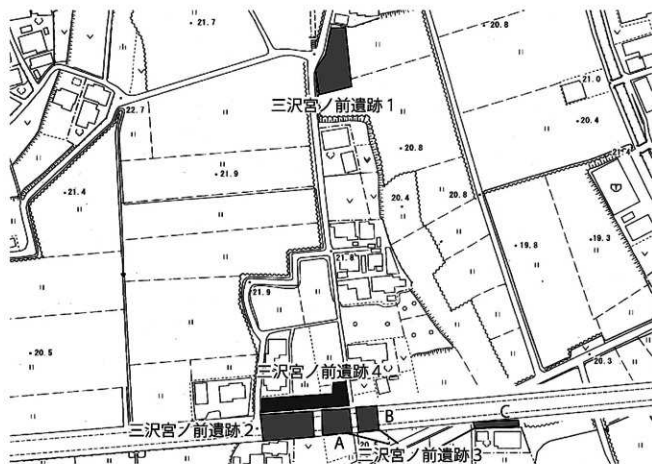
小郡市は、中央部を南北に宝満川が流れ、北西部に通称三国丘陵、北東部に花立山（標高130.6m）から延びる丘陵があり、南側は緩やかに下る平坦な台地へ移行し、筑後平野へと連なる。

三沢宮ノ前遺跡4（1）は、三国丘陵からなだらかに伸びる段丘上に位置する。これまでに、3回調査が行われている。第1次調査は、平成5年度に日吉神社のすぐ南東側で実施され、弥生時代の集落を中心に中世の溝状遺構も確認された。第2次調査は、本調査地のすぐ南隣で平成14年度に実施され、古墳時代後期を中心に中世の溝状遺構も確認された。第3次調査も、本調査地のすぐ南隣で平成24年度に実施され、中世の集落や溝状遺構が確認されている。

三沢地区周辺の範囲において人々の活動が最初に確認されたのは旧石器時代である。三沢蓬ヶ浦遺跡（2）で黒曜石製ナイフ形石器、三沢栗原遺跡（3）でサヌカイト製角錐状石器、西島遺跡（4）でサヌカイト製国府型ナイフ形石器と黒曜石製角錐状石器が出土したぐらいであるが、小郡市内では旧石器時代の活動の痕跡があまり見つからないことから非常に貴重なものである。

縄文時代になると、北松尾口遺跡（5）で早期の条痕文土器筒土器が落し穴に伴って見ついているくらいで、落し穴以外の遺構に伴う土器はほとんど見当たらない。

弥生時代になると、人々の活動は活発化する。前期から中期前半にかけて、三国丘陵上に三沢遺跡、三沢蓬ヶ浦遺跡、一ノ口遺跡、北松尾口遺跡、北牟田遺跡、牟田々遺跡、三沢栗原遺跡など多数の集落が形成される。中には、三沢北中尾遺跡（6）のように貯蔵穴を環濠で囲んだ遺跡や、ムラの一部を囲む柵や物見櫓と考えられる建物が検出され、クニ形成直前の拠点集落と考えられた一ノ口遺跡（7）がある。上記の遺跡は、中期後半には姿を消すものの、後期中頃以降より、集落規模は小さいながらも人々の活動を見出すことができる。

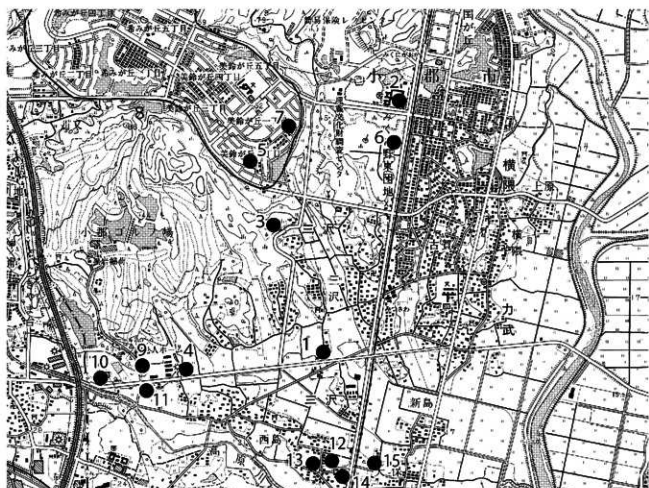


第1図 三沢宮ノ前遺跡 過去の調査地点位置図 (S=1/2,500)

古墳時代になると、後漢鏡が出土した三沢栗原遺跡(3)、滑石製品を製作していたと考えられる西島遺跡(4)や本調査区と本調査区の南隣の三沢宮ノ前遺跡2(1)で集落が営まれているくらいで、弥生時代と比べ集落の数が減る。しかし、6世紀末には、三国丘陵上の斜面を利用した須恵器の窠窯(菊又遺跡群(8))が築造され、須恵器生産が行われており、人々の活動の様子は窺い知ることができる。一方で、古墳が三国丘陵上に多数築造される。特に、中期の花登古墳群(9)からは鉄鋌が出土しており、韓半島とのつながりが想定されている。また、後期には三国丘陵上に67基に及ぶ横穴式石室や横穴墓の三沢古墳群(8)が築造され、鉄器を副葬する古墳の割合が高く、また、馬を埋葬する土壇墓が発見されていることから「牧」の管理者を葬ったと目されている(2001『小郡市史4巻』)。古代になると、古代駅伝制に伴う駅家と考えられる施設が西島遺跡5(10)で見えられた。ちょうど肥前国府からの想定駅路の延長線と筑後国府からの想定駅路の交点にあたることから、肥前国基肄駅である可能性も考えられている。また、三国丘陵上では菊又遺跡群(8)などで火葬墓が見つまっている。

中世になると、輸入陶磁器が多数出土した西島遺跡3(11)や、現在の西鉄沿線近くには1359年の大原合戦に関連する三沢寺小路遺跡(12・13)、三沢権道遺跡(14・15)などがある。詳細は、三沢宮ノ前遺跡3でまとめられているので参照願いたい。

以上のように、周辺地域では古くは旧石器時代から中世まで数多くの遺跡に囲まれた土地であることがわかる。特に、本調査地では、古墳時代と中世の集落像が見えてきており、今後の地域の歴史を復元するにあたり、非常に大きな意味をもつと言える。



- 1: 三沢宮ノ前遺跡 2: 三沢蓬ヶ浦遺跡 3: 三沢栗原遺跡 4: 西島遺跡 5: 北松尾口遺跡 6: 三沢北中尾遺跡
 7: 一ノ口遺跡 8: 三沢古墳群(菊又遺跡群) 9: 花登古墳群 10: 西島遺跡5 11: 西島遺跡3
 12: 三沢寺小路遺跡2・4 13: 三沢寺小路遺跡3・5 14: 三沢権道遺跡2 15: 三沢権道遺跡1

第2図 三沢宮ノ前遺跡周辺の主要遺跡分布図 (S=1/25,000)

第3章 遺跡の概要

三沢宮ノ前遺跡4は、周知の埋蔵文化財包蔵地の中央部西側より相当する。取り付け道路新設工事のための道路部分のみの発掘調査であったため、南北最大12.0m、東西最大57.0mのL字形をした非常に細長い範囲である。遺構検出面の標高は20.7~20.9m前後、現地表から約0.25~0.5m下る高さで確認している。層位は、褐灰色土の耕作土層が堆積し、その下より遺構検出面である茶褐色ローム層を検出した。

出土遺構は、古墳時代後期の竪穴式住居跡2軒、中世の掘立柱建物2棟、溝9条、井戸と考えられる土坑1基、近世以降の溝1条、その他ピットを数基検出した。特に、調査区西側で検出した竪穴式住居跡2軒や、調査区東側で検出した掘立柱建物2棟や溝1条は、本調査地の南側で発見された三沢宮ノ前遺跡2・3から続くと考えられる遺構である。調査区西側で検出した2号竪穴式住居跡からは、非常に残りの良い土器が床面に近い覆土から出土している。しかしながら、全体的には、遺構密度の割に遺物はほとんど出土しなかった。また、季節がらもあつてか、常時水がわき出る状態で、調査は非常に難航したが、三沢宮ノ前遺跡の集落の広がりを捉えるうえで大きな成果となった。

三沢宮ノ前遺跡4で検出した遺構・遺物は以下のとおりである。

●遺構

- | | |
|---------|-----|
| ・竪穴式住居 | 2軒 |
| ・掘立柱建物 | 2棟 |
| ・土坑（井戸） | 1基 |
| ・溝 | 10条 |
| ・ピット | |

●遺物

- ・土師器
- ・須恵器
- ・磁器

第4章 遺構と遺物

1. 竪穴式住居跡

1号竪穴式住居跡（第4図・図版2・3）

調査区北西部に位置し、検出面で標高20.8mを測る。遺構の残存状況が非常に悪く、検出面の段階で、すでに本来床として使用していた面を残していない。遺構はほぼ正方形を呈するものと考えられ、大きさは東西5.06mである。南北は現状で5.71mを測るが、北側が不明瞭であり、本来は5m程度で取まるか。柱穴は4本と考えられるが、うち1本は確認できなかった。確認できた3本はいずれも大きさ40cm程度である。カマドは確認されていない。貼床はほぼ床面全面に及び、2か所の浅い土坑状の掘り込みを検出した。

遺物は出土しなかった。

2号竪穴式住居跡（第4図・図版2・3）

調査区の南西端部に位置し、三沢宮ノ前遺跡2で確認されたC7と同一の遺構である。今回検出されたのは住居跡の北半部分で、検出面の標高は20.7mを測る。遺構の平面形は本来ほぼ正方形を呈するものと考えられ、大きさは現状で東西3.78m、南北は今回確認された部分で1.60mを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は最大31cmを測る。ここで注目されるのが、北東・北西コーナー部の掘り込みである。特に北東部には第8図7の石材を埋め込んでおり、コーナーに設置されていた木柱等を固定するために供していたものと考えられる。なお、床面付近は湧水が激しく、主柱穴は確認できなかった。

カマドは残存していないが、北側壁面中央部の幅約60cmの範囲が赤変しており、本来この部分に設置されていたと考えられる。なお、カマド左側袖があったと想定される場所で、大きさ30cm、幅10cm程度の粘土塊を検出した。遺物は、床面ほぼ直上及びやや浮いた状態で比較的多



第3図 三沢宮ノ前遺跡4 全体図 (S=1/200)

く検出した。床面には全体的に貼床を施すが、やはり湧水により厚さ等は確認できなかった。

出土遺物（第8図・図版5）

第8図1は須恵器遼の小片である。外面に工具により連続して刻み目を施す。作りが丁寧で、時期は6世紀後半頃と考えられる。2から4は土師器甕で、2は口縁部小片である。3は器壁が厚く、作りが粗い。口径は10.0cmで、胴部最大径は18.5cm程度である。内面に成形時の粘土接合痕や指頭痕を明瞭に残す。4は遺構図中に見られる甕で、検出時にはほぼ上下に二つに割れた状態であった。口径11.2cm、器高14.8cmを測る。5・6は土師器皿である。5は口径15.2cm、器高4.2cmを測る。口縁部は直線的に開く。6は遺構図中に見られる皿で、口径14.8cm、器高5.3cmを測る。口縁部は内湾し、内面には工具痕が残る。7は上述した花崗岩の根石である。大きさは11.0×10.9cm、厚さは3.5cmで、本来は長方形の石材を断ち割って使用したものと考えられる。

2. 掘立柱建物

1号掘立柱建物（第5図・図版2・3）

調査区の西部に位置し、検出面の標高は20.9mを測る。1×1間の建物で、主軸はN-10°-Eである。規模は桁行・梁行とも約2.2mで、ほぼ正方形の建物である。柱の掘り方は楕円形を基調とし、径は21～30cm、深さは現状で7～11cmを測る。

遺物は出土しなかった。

2号掘立柱建物（第5図・図版3）

調査区の東端付近に位置し、標高は20.7mを測る。三沢宮ノ前遺跡3で検出した掘立柱建物と同様に1×1間の建物と推測される。規模は桁行4.8～4.9m、梁行約2.3mで、長方形の建物である。柱掘り方は楕円形を基調とし、径は33～45cm、深さは現状で25～40cmを測る。北西部の柱穴は、柱の建て替えを行ったのか、底面のくぼみが隣接して2か所ある。

遺物はP1より土器の小片が出土したが、図化するにいたらなかった。

3. 土坑

1号土坑（第6図・図版3）

調査区の東側中央部よりにおいて検出した土坑である。標高は20.7mを測る。平面形は、現状110cm×95cmの隅丸長方形を呈し、深さは最大40cmを測る。埋土は、黄褐色の粘土層と黒褐色の粘土層が互層になっていた。10cm位掘り下げたあたりから、常時水が湧き出てくる状態であり、井戸の可能性も考えられる。

遺物は出土しなかった。

4. 溝

1号溝（第7図・図版4）

調査区の東側中央部に位置し、三沢宮ノ前遺跡3で確認された1号溝状遺構と同一の遺構であり、調査区外へと延びる。標高は20.7mを測る。溝は、南北方向に延び、現状で全長約6.1m、幅2.2～2.4m、深さ最大23.0cmを測り、断面形状は逆台形を呈する。埋土は、水平堆積の様相を示し、床面直上は非常に粘質の高い粘土である。また、床面も非常に粘質の高い粘土層であった。溝の軸がほぼ正北位であることから、東側の竪穴式住居跡群と西側の掘立柱建物群とを区画する区画溝として利用されていた可能性が想定される。季節がらもあるのか、常時水が湧き出ていた。

埋土からは土師器片がやや多く出土しているが、図化するにいたったものは少ない。

出土遺物（第8図・図版5）

第8図8は須恵器坏蓋の小片である。頂部には、半円形に直線を2本引く線刻が描かれている。9は土師器鍋の小片である。10は青磁碗の小片である。11は白磁碗の小片である。口縁部は玉縁状になっている。

2号溝（第7図・図版4）

調査区の東側中央部よりに位置し、三沢宮ノ前遺跡2で確認された1号溝状遺構と同一の遺構であり、調査区外へと延びる。標高は20.6mを測る。溝は、南北方向に延び、東辺・西辺の両側に遺構検出面から約10～15cmのところではラスを持つ。現状で全長約5.75m、幅3.7～4.0m、深さ最大37cmを測り、断面形状は逆台形を呈する。埋土は、水平堆積の様相を示すが、4層の粘質性の高い黄褐色土層の下に5層の黒褐色土層を、その下の6層から青灰色砂層を検出した。当初は、6層が地山面と想定したが、溝の側面の堆積状況を見ると、4層の直下から6層が堆積していたことから、5層は貫入土と考えられる。よって、2号溝の遺構の掘り下げは4層で止めた。なお、2号溝内の西側からは南北方向に黒褐色土の溝の掘り込みを確認したので、掘り下げを行った。この掘り込みは、全長4.8m、幅0.3～0.6m、深さ最大40cmを測り、断面形状は逆台形を呈する。2号溝は、溝の軸がほぼ正北位であることから、区画溝として利用された可能性が想定される。季節がらもあるのか、常時水が湧き出していた。

埋土からは少量の土師器片や磁器が出土しているが、図化するにいたったものは少ない。

出土遺物（第8図・図版5）

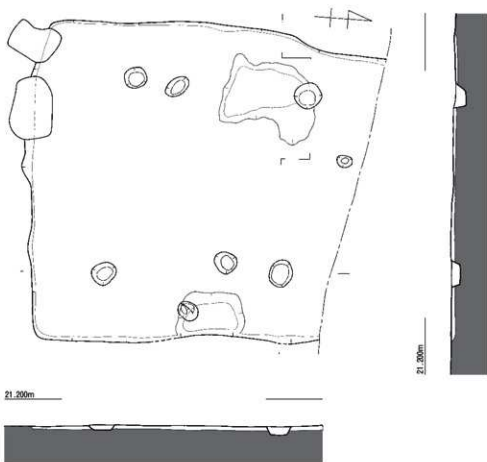
第8図12は磁器碗、13は磁器猪口の小片である。12のみ、口縁部直下に2条の染付が施されている。

3号溝（第3図・図版4）

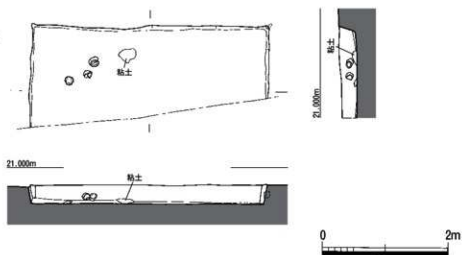
調査区の中央やや西側に位置する浅い溝状遺構である。南北ともに調査区外へと延びる。1・2号溝と異なり段の上に位置し、標高は20.9mを測る。遺構の残存状況が非常に悪く、現状で平面はやや不整形で、深さは最大3cm程度である。長さは約6.8mを測る。

遺物は出土しなかった。

1号竖穴式住居跡

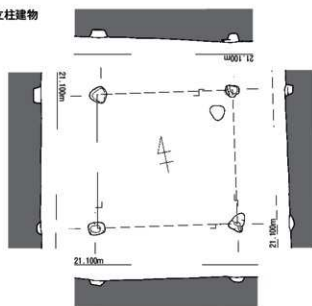


2号竖穴式住居跡

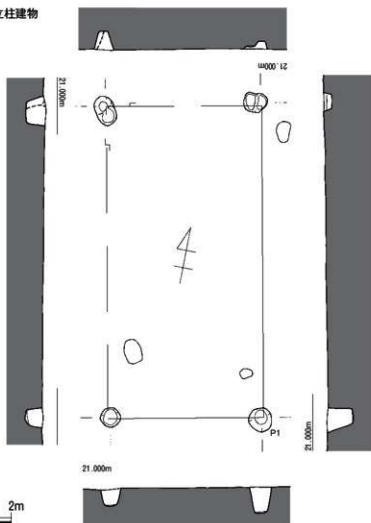


第4図 1号竖穴式住居跡・2号竖穴式住居跡実測図 (S=1/60)

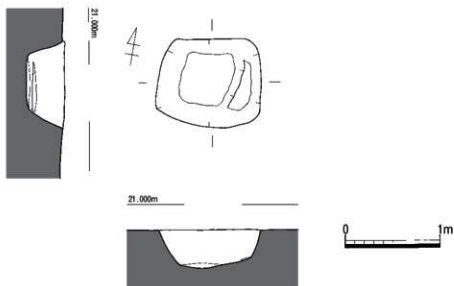
1号掘立柱建物



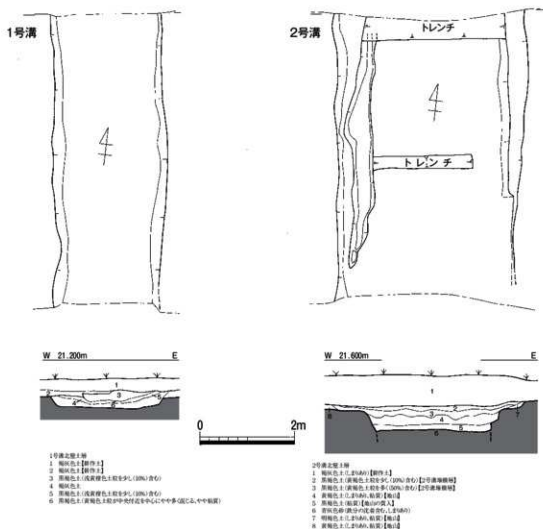
2号掘立柱建物



第5図 1号掘立柱建物・2号掘立柱建物実測図 (S=1/60)



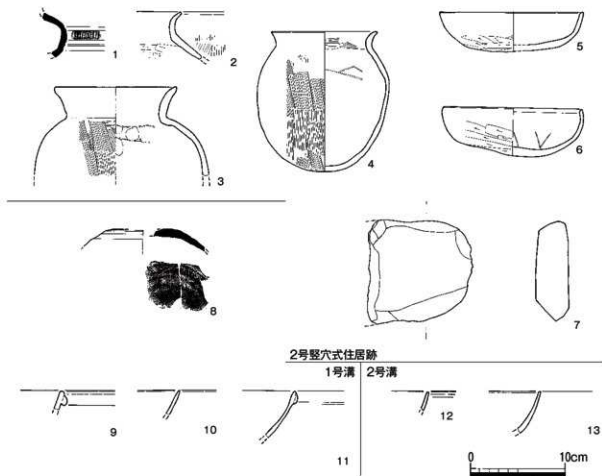
第6図 1号土坑実測図 (S=1/40)



- 1号溝北壁土層
1. 褐色土【動物土】
 2. 褐色土【動物土】
 3. 赤褐色土(灰黄褐色土混雑少く(30%)赤化)
 4. 褐色土
 5. 赤褐色土(灰黄褐色土混雑少く(30%)赤化)
 6. 赤褐色土(赤褐色土が中心部付近を中心やや多量(20%)やや粗質)

- 2号溝北壁土層
1. 褐色土(土、25%砂)【動物土】
 2. 赤褐色土(赤褐色土混雑少く(30%)赤化)【2号溝南壁側】
 3. 赤褐色土(赤褐色土混雑多(50%)赤化)【2号溝南壁側】
 4. 赤褐色土(土、25%砂、粘質)【動物土】
 5. 赤褐色土(灰黄土)【動物土】
 6. 赤褐色土(赤褐色土の混雑多、土、25%砂)
 7. 褐色土(土、25%砂、粘質)【動物土】
 8. 赤褐色土(土、25%砂、粘質)【動物土】

第7図 1号溝・2号溝実測図 (S=1/80)



第8図 出土遺物実測図 (S=1/4)

第5章 まとめ

まず、三沢宮ノ前遺跡4において検出した遺構について簡潔にまとめておくこととしたい。

三沢宮ノ前遺跡4の遺構を検討するにあたって、南側に隣接する三沢宮ノ前遺跡2・3との対応関係を整理する必要がある。それぞれ、以下のとおりである。

- ・ 2号竪穴式住居跡（三沢宮ノ前遺跡4）= 7号住居跡（三沢宮ノ前遺跡2）
- ・ 1号溝（三沢宮ノ前遺跡4）= 1号溝状遺構（三沢宮ノ前遺跡3）
- ・ 2号溝（三沢宮ノ前遺跡4）= 1号溝状遺構（三沢宮ノ前遺跡2）
- ・ 3号溝（三沢宮ノ前遺跡4）= 4号溝状遺構（三沢宮ノ前遺跡2）

また、遺構の時期を遺物から判別できる遺構は、以下のとおりである。

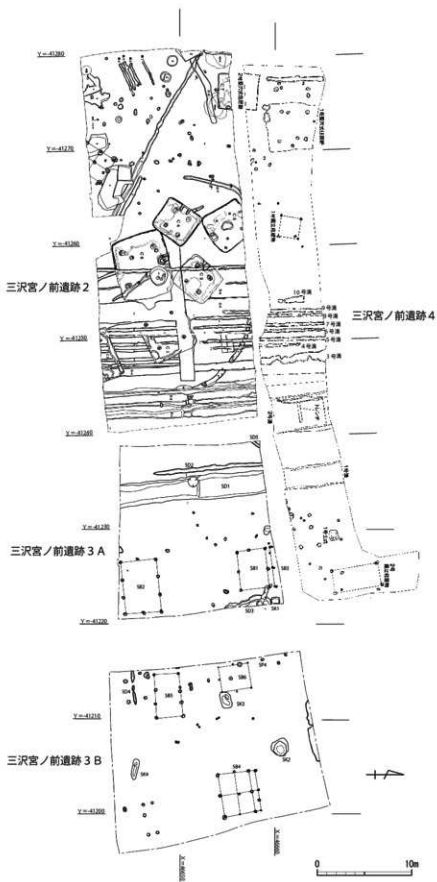
- ・ 2号竪穴式住居跡 = 6世紀後半
- ・ 1号溝 = 中世
- ・ 2号溝 = 近世

1号溝は、須恵器が出土していることから、時代が遡る可能性も想定できるが、出土遺物の多くが青磁・白磁を含む12世紀～13世紀に相当する。また、1号溝の南側に続く三沢宮ノ前遺跡3の1号溝状遺構は中世の溝と指摘されていることから、中世と時期比定して問題なからう。

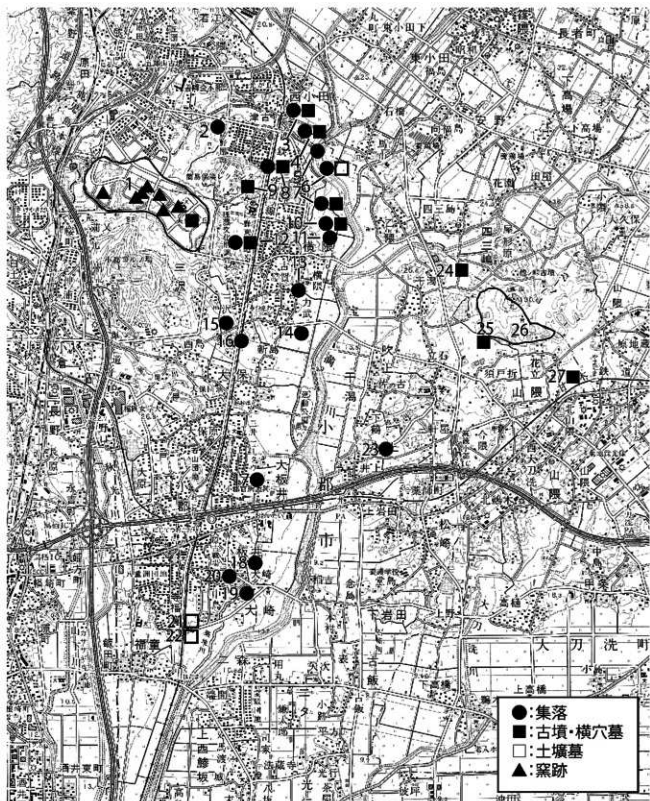
その他、遺構の配置や切り合い関係より、1号竪穴式住居跡と2号掘立柱建物とは時期比定ができそうである。1号竪穴式住居跡は、2号竪穴式住居跡や三沢宮ノ前遺跡2で検出された7軒の竪穴式住居跡との位置関係から、三沢宮ノ前遺跡2で指摘された西群の住居群に含まれる。また、主軸方位の関係をみると、1・2号竪穴式住居跡は、三沢宮ノ前遺跡2で東群の住居群とされている1・5・6号住居と同じ向きをしていることから、これらの住居と同時期の遺構の可能性が高く、6世紀後半代に比定できよう。また、2号掘立柱建物は、南側に隣接する三沢宮ノ前遺跡3で報告されている掘立柱建物群と同じく柱穴が規則正しく配置されていることから、一括して同時期の建物と考えられ、中世に比定できよう。残念ながら、遺物の出土がほとんどないため、これ以上の時期の細分は不可能である。

次に、6世紀後半前後の小郡市内の遺跡の分布状況を把握することで、本遺跡の位置付けを行いたい。6世紀後半から7世紀前半における小郡市内の遺跡分布状況は第10図のとおりである。三国丘陵では、古墳や丘陵の斜面を利用した横穴墓の築造が活発に行われており、その周辺では集落の広がりも確認できている。また、丘陵地の西部では、斜面を利用した竈窯が7基築かれ、須恵器生産を行っていたようである。花立山周辺でも花立山穴観音古墳や群集墳・横穴墓が相次いで築造されており、周辺でも干潟舟底1号墳や西下野1号墳など古墳築造が活発である。一方で、小郡市中央部に目を向けると、現在の小坂井地区・大板井地区を中心に集落が広がっており、寺福童地区では土壙墓が確認されている。また、宝満川東岸でも井上南内原遺跡3などで集落の広がりを確認できている。

こうして、6世紀後半から7世紀前半の小郡市内を概観すると「古墳や横穴墓の築造は、市北部の三国丘陵や花立山周辺に限られる」という特徴が挙げられる。この特徴から言えることは、市北部とそれ以外の間では集落の性格に差異があったのではないかと推定できることである。この時期の古墳築造は、当時の有力農民層にまで普及しており、三沢古墳群は「牧」の管理者の墓として想定されている。そして、地理的に三沢宮ノ前遺跡の集落は、この「牧」の管理者集団に属する集落の広がり的一部ではないかと考えられる。集団の性格の差異を示すのではないかと考えられる遺物に須恵器のヘラ記号がある。ヘラ記号は、製作技法と一緒に検討することで、須恵器を製作する工人集団の性格を明らかにすることができると考えられてきた。そして、ヘラ記号は、生産された須恵器の供給先を示す記号とも考えられてきた。小郡市内で出土したヘラ記号が判読できる坏蓋・坏身は764点であり、ヘラ記号の種類は46種類である。今回出土した須恵器に描かれているヘラ記号は、津古中剪遺跡で出土した1点のみと少ない。よって、工人集団や供給集団について言及することは難しいが、想像をたくましくすれば、三沢宮ノ前遺跡や津古中剪遺跡を含めた三国丘陵の広い範囲が1つの集団であった可能性は考えられよう。よって、遺物からも三沢宮ノ前遺跡の集落は、三国丘陵上に展開する「牧」の管理者集団に属する可能性が高いと言えないだろうか。今後の発掘調査成果に期待したい。



第9図 三沢宮ノ前遺跡周辺調査地検出遺構 (S=1/400)



- 1: 三沢古墳群・苅又竈跡群 2: 津古東宮原遺跡VI 3: 津古土取遺跡 4: 津古生掛遺跡 5: 津古中野遺跡
 6: 三国の鼻遺跡 7: 横隈北田遺跡 8: 横隈井ノ浦遺跡 9: 三沢京江ヶ浦遺跡 10: 横隈狐塚遺跡
 11: 横隈住解田遺跡 12: 横隈狐塚遺跡7 13: 横隈十三塚遺跡 14: 力武内畑遺跡 15: 三沢ノ前遺跡
 16: 三沢水鳥遺跡 17: 大板井遺跡 18: 18: 小坂井運輪遺跡 19: 大崎小園遺跡 20: 大崎井牟田遺跡
 21: 寺福童内畑下道東遺跡 22: 寺福童遺跡 23: 井上南内原遺跡 24: 干潟舟底1号墳 25: 花立山穴観音古墳
 26: 花立山古墳群 27: 西下野1号墳

第10図 6世紀後半～7世紀前半段階の遺跡分布図 (S=1/50,000)

三沢宮ノ前遺跡4出土遺物観察表

<出土土器>

法量=口：口径、高：器高
器種=土：土師器、須：須器、青：青磁、白：白磁、磁：磁器

検出 番号	図版 番号	出土 遺物	器種	法量 cm (復元値)	色調	胎土	焼成	成形・調整方法	残存部	備考
1	8	2号壺式 瓦葺器	瓶、罐	高：4.6 内径：12.0 外径：15.7	黄	黄砂を少し含む	良好	内：凹線コナテ 内：凹線コナテ	胴小片	断面が厚く 底に土層 と一致
2	8	2号壺式 瓦葺器	土、甕	高：5.0 内径：12.0 外径：15.7	黄	1m以下の砂砂をやや多く含む	良	内：コナテ、ハケメ 内：コナテ、ハケメ	口一胴上 小片	口内 に 黄一 色
3	8	2号壺式 瓦葺器	土、甕	口：12.8 高：9.2 内径：12.0 外径：15.7	黄	4m以下の砂砂をやや多く含む	良	内：コナテ、ハケメ 内：コナテ、凹線など	口内 に 黄一 色	口内 に 黄一 色
4	8	2号壺式 瓦葺器	土、甕	口：11.2 高：14.8 内径：12.0 外径：15.7	黄	2.5m以下の砂砂を少し含む	良	内：コナテ、ハケメ 内：ハケメ、土直テ	口一胴約 1/3	口内 に 黄一 色
5	8	2号壺式 瓦葺器	土、瓶	口：15.2 高：4.2 内径：12.0 外径：15.7	黄	1m以下の砂砂を少し含む	良	内：コナテ、ハケメ 内：コナテ、凹線など	口一胴約 2/3	口内 に 黄一 色
6	8	2号壺式 瓦葺器	土、瓶	口：14.6 高：5.5 内径：12.0 外径：15.7	黄	2m以下の砂砂をやや多く含む	良	内：コナテ、ハケメ 内：コナテ、凹線など	口一胴約 1/3	内面に半月に 底打する 土の 痕のハナ りあり
8	8	1号壺	瓶、甕	高：2.2 内径：12.0 外径：15.7	黄	1m以下の砂砂を少し含む	劣	内：凹線ハナテ 内：テ、凹線コナテ	胴約1/3	内面に半月に 底打する 土の 痕のハナ りあり
9	1号壺	土、調	甕	高：2.0 内径：12.0 外径：15.7	黄	1m以下の砂砂をやや多く含む	良	内：コナテ 内：コナテ	口小片	内面にコナ テ
10	1号壺	青、陶	甕	高：2.6 内径：12.0 外径：15.7	黄	黄砂を少し含む	良好	内：輪 内：輪	口一胴上 小片	
11	1号壺	白、陶	甕	高：4.9 内径：12.0 外径：15.7	黄	黄砂をやや多く含む	良好	内：輪 内：輪	口一胴上 小片	
12	2号壺	磁、瓶口	甕	高：2.06 内径：12.0 外径：15.7	黄	黄砂をやや多く含む	良好	内：輪 内：輪	口一胴上 小片	片断に欠け
13	2号壺	磁、瓶	甕	高：4.4 内径：12.0 外径：15.7	黄	黄砂をやや多く含む	良好	内：輪 内：輪	口一胴上 小片	

<出土石器>

検出 番号	図版 番号	出土遺物	種類	計測値				備考
				長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	
7	8	2号壺式瓦葺器	瓶石	11.0	10.9	3.5	715	



①調査区東側全景 (真上から)



②調査区西側全景 (真上から)



①三沢宮ノ前遺跡4上空から花立山を臨む（西側から）



②1号竪穴式住居跡・2号竪穴式住居跡・1号掘立柱建物全景（真上から）



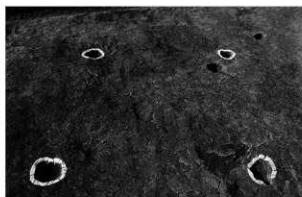
① 1号竪穴式住居跡完掘 (南側から)



⑤ 2号竪穴式住居跡北西隅部掘込(南東側から)



② 2号竪穴式住居跡貼床検出 (南側から)



⑥ 1号掘立柱建物完掘 (南側から)



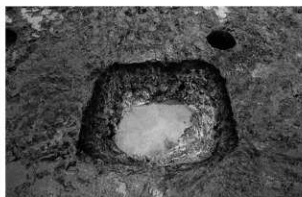
③ 2号竪穴式住居跡遺物出土状況 (北側から)



⑦ 2号掘立柱建物完掘 (南側から)



④ 2号竪穴式住居跡北東隅部掘込(南西側から)



⑧ 1号土坑完掘 (南側から)

図版4



①1号溝完掘 (南側から)



③2号溝完掘 (南側から)



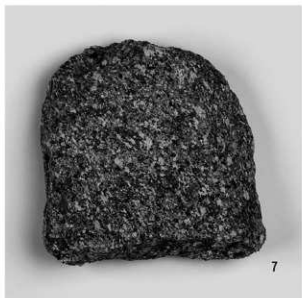
④2号溝北壁土層 (南側から)



②1号溝北壁土層 (南側から)



⑤3号溝～10号溝完掘 (南側から)



報告書抄録

ふりがな	みつさわみやのまえいせき4								
書名	三沢宮ノ前遺跡4								
副書名	福岡県小郡市三沢所在遺跡の調査報告								
巻次									
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書								
シリーズ番号	第296集								
編著者名	西江幸子(編)・杉本岳史								
編集機関	小郡市教育委員会								
所在位置	〒838-0198 福岡県小郡市小郡255-1 Tm.0942-72-2111								
発行年月日	平成27年3月31日								
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
三沢宮ノ前遺跡4	福岡県小郡市三沢	40216		33°25'11"	130°33'23"	2014.7.8 ～ 2014.9.11	482.44㎡	本郷基山線取り付け道路新設工事	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
三沢宮ノ前遺跡4	集落	古墳時代後期中世近世	竪穴式住居跡 掘立柱建物 土坑 溝		土師器 須恵器				
要約	三沢宮ノ前遺跡の第4次調査区は、第2次調査区・第3次調査区の北側に隣接しており、遺構検出面で標高20.7～20.9mを測る。遺構の中心は、第2次調査区から広がる古墳時代後期後半(6世紀後半)の住居群と、第3次調査区から広がる中世の掘立柱建物や溝である。本調査区は、東西方向に細長かったため、詳細な遺跡の検討はできないが、これまでの隣接地での調査成果を含め、古墳時代後期後半や中世の遺跡の広がりがわかり、この地のこれらの時代の解明へと一歩近づいたと言える。								

三沢宮ノ前遺跡4

小郡市文化財調査報告書第296集

平成27年3月31日

発行 小郡市教育委員会
小郡市小郡255-1

出版 ハイウエーブデザイン
小郡市力武255-44